

歌誌「黄雞夏号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 アンソロジー 2016〜2020 VI

雪の積む朝焼け空の散歩道きさらぎ寒のこゝろを春に

我が冊子謹呈せんと思いたる陳寿の恩師はおくやみ欄に

親燕忙しく行き交う寺の門口開け餌待つ雛の夏端月

青空と雪の鳥海写し込み白雲流れる浜の球面鏡

ひとの去りひと夏越えし住居跡荒草蔓延り虫鳴き頻る

秋彼岸さんざめく子らの声残し展墓の帰路は黄昏のいろ

秋天へ白煙昇る野辺送り憶い携え向う箸渡し

集い来て語らい交わすたい焼きの店は人生の十字路のごと

OB会の名簿届いて辿る名に親交ありし物故者増えおり

半世紀交流途絶えし古き友LINEで復活新たな歩み

この冬は雪搔き三度と安堵すも不意に奈落へCOVID-19

天災に人災加わり原発忌人災に人災重なる新型コロナ

不祥事も震災忌さえ呑み込んで新型コロナ吹き荒れし国

コロナ禍の今年の観桜慎ましき城址公園一方通行

コロナ禍の外出自粛の置き土産われ失いし曜日感覚